



人生の師 長倉先生を偲んで

Tsuguo YAMAOKA 山岡亜夫 長光会, 千葉大学名誉教授

第2次世界大戦後我が国の物理化学に新しい風が吹きはじめ、分子の研究に量子論など電子を扱う研究が行われるようになった。1946年助教授に昇進された長倉先生は、シカゴ大学のMulliken先生の下で分子軌道法、特に分子間電子移動に伴うCTコンプレックスの研究を行ってこられた。先生が1955年シカゴより帰国されて、日本化学会での分子構造総合討論会の創設に尽力された。分子の回転、原子間結合の振動そして分子の電子状態、と吸収する電磁波の長さの順に分かれた研究会だった。これらの研究会を通じて先生は分子の電子状態の分野で先導的に活躍され、分子の物理化学はこれまでと様相を変えていった。

私は千葉大学の助手として学生さんの実験指導をしていたが、千葉大には大学院がなく研究の場がなかった。たまたま、千葉大で親しくしていただいていた入江春雄先生が長倉先生の先輩に当たられる方で、私が長倉先生の研究室で勉強する機会を整えて下さった。このとき初めて、私は研究者の世界に足を踏み入れた。研究室は分子の電子状態の先進的研究分野に夢を抱き、本郷の研究に飽き足らない議論好きな秀才の集団であった。研究室には長倉先生の右腕として信頼された細矢治夫先生がいらっしゃって、研究と研究生活の先輩として院生たちの頼りであった。私は長倉先生ご提案の数種のテーマについて文献を調べA. Scheibeらが研究として先行していたが(H. Kohler, A. Scheibe, *Z. Anorg. Allg. Chem.* **1956**, 285, 221), CTコンプレックスの研究として興味深いので、さらに詳細に研究したいと思い、細矢先生に相談に乗っていただき、「トリアミノベンゼンのプロトン付加」というテーマを選んだ。細矢先生にはこの後も学位論文の完成まで長倉先生とともに大変お世話になり感謝しております。

先生はいつも凛とした武士のような方で、考え方は真っ直ぐでゼミのときでもお酒が入って機嫌の良いときにも姿勢は変わらなかった。数多くの公職にご尽力され、超多忙にもかかわらずどんなときも研究が第一であった。あるとき私は柏木寛先生(元富山大学)と光反応中間体である芳香族ニトレンを捕まえる実験を行っていたが、装置が古いためなかなか見つからない。その様子をご覧になってすぐに理化学研究所に電話して、理研の新しいフラッシュホトリシスをお借りする段取りを取って下さり、その結果見事にニトレン

を捕まえることができた。これは一例に過ぎないが実験室においても随分助けられた。

論文を書き上げたときにドラフトを見ていただくが、実験内容、データの整合性や英文表現のチェックは筆舌に尽くしがたい。実験データの軽視や引用文献の読み落としなどについては特に厳しい。あるとき、私はドナーとアクセプターの化学反応をラピッドスキャンで追っていた。この反応は両分子が接触すると電子移動が生じ続いて化学反応が生じるが、時間差は短く観測に低温での測定が必要である。しかし、使用していた装置が低温実験に適していないため時間差が観測できず、電子移動と化学反応の始まり時間を同時と近似してしまった。先生は論文の下書きを綿密に読まれるためすぐに見つかってしまった。この点を先生は穏やかに指摘して下さいました。しかし、次の私の言い訳が起爆剤となった。「ですが、両方の時間はほとんど差がないと思われましたので」途端に先生の怒りが爆発した。「君は考えがあまり。誰も論文を同情しながら読む人はいない。そんなことだから論文1つ満足に書けないんだ! だいたい君は普段から……」そのとおりであった。それだけにパンチは効いた。このパンチは私の研究者人生の姿勢を最も大きく修正した。若い研究者は最初に指導を受ける先生の影響を極めて大きく受けるという。長倉研究室で研究する幸運に恵まれて、先生の研究哲学が私の脳裡に上手く刷り込まれていることを期待する。

たまに夜遅くまで実験していると先生からお声がかかることもあった。「食事に行かない?」大体、研究所近くの“鰯”か、“てんぷら屋”だった。こんなときの雑談は先生の研究を離れた人間性を垣間見ることができ楽しかった。いまだに何となく耳に残っているのは長倉先生の、「最近、Old Parrがうまいことを発見したよ!」という言葉で、Old Parrを見ると先生を思い出すようになった。地下鉄東西線の通学仲間だった柏木先生が一緒のときが多かった。

先生は後の著書で科学者の3つの適性について述べられているが、その中で「走り出したバスの後を追って飛び乗るのはよしなさい。主流を追わない在野精神を持つことが日本の科学の独創性にはぜひ必要だ」と述べられている。後進にもこの言葉を伝えたい。